

令和3年度第1回公立大学法人宮城大学経営審議会議事録

日 時	令和3年6月25日（金）午後1時30分から同3時40分まで
場 所	宮城大学大和キャンパス本部棟3階 大会議室
出 席 者	阿部博之委員，大山健太郎委員，田中正人委員，石井幹子委員，佐藤勘三郎委員，堀切川一男委員，川上伸昭議長，正木毅委員，西川正純委員，風見正三委員，工藤和浩委員 (オブザーバー) 武田理事，西條力理事，井上誠副学長
事務局等	藤田事務局長，高橋事務局次長兼総務課長，松本財務課長，佐藤学務課長，佐藤学術情報室長，齊藤太白事務室長，横田研究推進・地域未来共創センター副センター長，企画・入試課 坂課長，小野寺課長補佐，齊藤主査
議 事 概 要	1 開会 2 挨拶（川上理事長） 本日は御多用の中，お集まりいただき感謝する。本年度から第3期中期計画がスタートした。令和3年度前期授業については，令和2年度の講義室等改修に加え，講堂を講義室として運用開始するなど，原則としてすべての授業を面接授業として実施している。 本日は，第2期中期計画の最終年度である令和2年度の業務実績と第2期中期計画6年間全体の業務実績，令和2年度決算が主な議案となるので，よろしく御審議賜るようお願いしたい。 3 議事録署名人の選任 川上議長から，前回会議の議事録について出席者に確認を求めた後，石井委員及び西川委員が議事録署名人に指名された。 4 現状報告 (1) 宮城大学の現状について ・ 資料2に基づき，正木委員から報告があった。 5 審議事項 (1) 議案1 令和2年度業務実績報告書（案）について (2) 議案2 第2期中期目標期間業務実績報告書（案）について ・ 資料3～5に基づき，正木委員から説明があった。 (3) 議案3 令和2年度決算（案）について ・ 資料6に基づき，工藤委員から説明があった。 ・ 現状報告及び審議事項(1)ないし(3)の説明が終了した後，一括して質疑を行い，以下のとおり質疑応答があった。

(佐藤委員)新型コロナウイルス感染症にしっかり対応することで原則すべての授業を面接授業として実施していることについては、首都圏の大学の面接授業実施状況と比較しても雲泥の差であり評価したい。また、入学者の学力向上も順調に推移しており、学力が堅持されていることは大切なことである。

一方、決算のポイントの中で、新型コロナウイルス感染症を要因とした事業の未執行や、県からの感染症対策事業費補助金などは一時的なものであり、それを念頭に置いてしっかりとした財政運営をしていく必要がある。

就職関係については、ウェブ面接が当たり前となり、今後も継続又は拡大していくことが考えられる。一方で、対面面接は依然重要なので、ウェブ面接のテクニカルな部分の指導だけではなく、対面面接へのフォローも引き続きお願いしたい。また、採用に関しては、スカウトサービスなどの新しい採用方法も出てきている。アフターコロナにおいては、企業活動が活発化し中小企業を中心に人材不足に陥ることが懸念されている。アメリカにおいては、実に中小企業の48%が問題を抱えており、日本においても同様の状況になることが予想されることから、大企業を中心にスカウトサービスなどの新しい採用方法の導入が進むことも考えられるので、念頭に置いてもらいたい。

就職率に関しては全く問題ないが、第一志望の業界・職種だったかなど就職満足度のような指標も今後検討してほしい。

(川上議長) ウェブ面接が増えると日本全国から学生が集まるため、本学の学生が競り負けてしまうことが懸念される。ウェブ面接では西日本の学生のコミュニケーション能力が目立つと聞いているので、キャリア開発室においてウェブ面接の指導を行っている。しかしながら、佐藤委員の御意見のとおりウェブ面接のテクニックだけではなく、人間性をどう鍛えるかだと思うので、コロナ禍においてもしっかりとした実践教育ができるように原則すべての授業を面接授業として実施しているところである。

もう一つ懸念されるのは、就職におけるインターンシップの比重が高まってきているところである。インターンシップにおいても東北の学生は積極性が低いところがあり、首都圏の学生に比してインターンシップへの参加率は低くなっているため、インターンシップの強化に取り組んでいる。

また、学生の就職満足度の把握については、調査状況等を確認の上、検討していきたい。

(工藤委員) 新型コロナウイルス感染症対策経費については、9月補正予算を編成するとともに、県からの補助金が使途限定であったため、目的積立金の取崩などの自己財源を充当することにより必要な対策に取り組んできたところである。結果として、講義室化や学内環境改善などのほかに授業の維持に必要な対策はさほどなかったが、今後も必要な支出が出てくることが見込まれるので、機動的に対応するとともに、優先順位をつけて対応することとしている。

(大山委員) 令和2年度及び第2期中期目標期間の自己評価が9割を超えて「Ⅲ」以上になったのはよいが、資料5の4ページにあるとおり、強化しなければな

らない計画No.17～19の共通教育に関する項目が「Ⅲ」のままなのは残念である。そのほか、専門教育の計画No.21と22、適正な教員配置の計画No.35～38が重要であると思う。今挙げた本質となる項目をいかに「Ⅳ」に上げるかが重要であり、厳しく言うと附帯的な他の計画No.の自己評定について自画自賛が強かったのではないか。この辺にしっかり取り組まないと優秀な学生の輩出にはつながらないし、他大学との差別化にもつながらない。評価というものは難しいところがあるが、やはり教育に関する項目が最も重要なポイントとなるし、学群・学類制の導入については、計画No.35の「効率的な教員組織への再編と弾力的な教員配置」の狙いでもあると思うので、強化をお願いしたい。

財務については、企業においてもコロナ禍による経費節減により利益が出ているくらいがある。大学は営利団体ではないので、学生が大学に来ないことにより管理費などの支出が減った分は翌年度以降コロナ禍が収束した段階で支出すべきである。これを早く還元するのが組織の基本であるが、無駄な支出ではなく、新たなカリキュラムやプログラムなどコロナ禍に入学した学生のリカバリーとなるものに充当して欲しい。

ウェブ面接については、当社では1次面接をウェブで実施するとしても最終面接は必ず対面で実施している。ウェブ面接はコロナ禍による一過性のものだろうし、企業側としてはウェブ面接だけで評価はできないと考えている。

(西川委員) 御指摘のあった計画No.17～19が含まれる共通教育については、高校での学びが大学の学びにつながっていないという高大接続の課題があるため、基礎学力の向上に取り組んでいるところである。また、専門教育の事業構想学群と食産業学群に関する計画No.21、22については、教員の適正配置や最新の研究を反映した教育を行っていくことが大学の使命でもあるので、その点も含めて「Ⅲ」としたものである。まだまだ努力しなければならないことがあるが、社会に貢献できる学生を輩出することが大学の評価にもつながっていくと思うので、その点を見据えて教育研究を進めていきたい。

(川上議長) 事業構想学群と食産業学群については、まだまだやらなければならないことが目前にあると考えている。そういう意味で到達点ではないだろうということで「Ⅲ」としている。事業構想学群については、デザイン研究棟が完成したばかりであり、これを活用してこれからの教育をどう変えていくかという課題がある。食産業学群については、教育の基礎となる研究力は上がってきていると考えているが、努力すべき点もあるし、教育に還元するというステップも残っている。数年のうちに次世代放射光施設が整備されるので、そこに参画することでよい教育に結び付けてほしいという期待感もあつての「Ⅲ」である。

学群・学類、学系の改革を実施し、学群を超えた授業の実施や複数の学群による活動など目に見える成果も出てはいるが、まだ途上であると考えているので、日ごろから意識付けをしているところである。御指摘を謙虚に受け止めて取り組んでいきたい。

新型コロナウイルス感染症対策の決算額123百万円の内容については、コロナ禍を乗り越えるためだけのものではなく、例えば看護臨地実習の代替として整備した看護実習用機器類は、副次的にアフターコロナにおいても学内看護実習の高度化に資する将来への投資にもなっている。また、可動機・椅子等の整備も主目的は密対策であるものの、アクティブラーニングなどよりよい教育を行うためにこれからの学生にも還元される将来への投資である。

(田中委員) 第2期中期計画の6年間で着実にレベルアップしてきたと思う。その中でも学生による授業評価に粘り強く取り組み、学生の回答率が高いことは非常によいことである。ここ1年は新型コロナウイルス感染症対策に取り組み、遠隔授業の確立と面接授業の再開を成し遂げたので、双方の長所を活かしながら今後の教育を進めてほしい。

第3期という新しい段階に入ったわけだが、卒業後10年を経過した卒業生を集めて、当時の大学での学びを振り返ってもらい、大学教育へのニーズの掘り起こしをするのにはよいタイミングではないか。現場で経験を積んだ卒業生は後輩に受けさせたい教育などのニーズを持っているはずなので、それを宮城大学らしく丁寧に拾い上げ、次の戦略を練ってもらいたい。

(川上議長) 本学にも同窓会はあるものの、組織的な同窓生の活用には至っていないのが現状である。

(西川委員) 食産業学群においては、就職活動がオンライン中心となり、卒業生の話聞く機会が減っている状況にあるため、キャリア教育の中で30代半ばの卒業生を呼んで学生に向けて話をしてもらう取組を行っている。また、教員と卒業生とのつながりは深く、情報を集めやすい状況にあるため、1、2年生のなるべく早い段階で先輩の話聞かせることで就職のイメージをつかんでもらうようにしている。これにより学生が自らの進路について深く考える機会にもなっているようでよい循環になっている。転職の情報も随時入ってくるので、その原因も把握しながら、学生のキャリア教育に活かしている。

(風見委員) 事業構想学群においては、個性的な学生も多く、食産業学群と比べると業界が広いため、横の連携がとりにくいところがある。ゼミ単位でのつながりはあるようなので、学群・学類や複数の研究室単位で声がけする時期にあると考えている。また、アントレプレナーの育成については、卒業生の中には早い段階で起業した者もいるので、そういった卒業生にスポットを当てて、学群レベルで分野横断的に取り組み、それを全学レベルに発展させるなど工夫していきたい。

(武田理事) 養護教諭については、人数が少ないこともあり、縦のつながりがあるので、毎年のように集まって情報交換などを行っている。看護職については、女性が多いのに加え、異動も多く、全体の状況を把握できていない状況にある。キャリア関係では、ゼミ単位でのつながりを活用し、それぞれの職種で活躍している卒業生を毎年招聘するとともに、活躍の状況や将来の展望などについて話をってもらうことが学生への刺激となっている。

これまで行ってきた看護教育に対する卒業生からの評価という形では情報を得たことがないため、是非取り組んでいきたい。開学10年後に一度だけ卒業生に対するアンケート調査を実施したことはあるが、以後は途切れているので、再考していきたい。研究科については、全体の人数が少ないので、担当指導教員が進路を把握するとともに、修了生からのアンケート結果を大学院教育の見直しに活かしているところである。

(川上議長) 現在、卒業生を対象とした就労状況調査を実施しているが、卒業生の所在を確認するのに苦労している。全体の把握となると難しい面があるが、つながりのある卒業生を教育にフィードバックすることはできているので、成果が出た場合は報告させていただく。

(石井委員) 看護学群の卒業生については、出身校としての宮城大学の特色が出てくるのはこれからだと思う。これまでの教員の努力は素晴らしいものであり、コロナ禍における看護教員の地域貢献に大変感謝している。

(堀切川委員) アドミッションセンターを設置し、入試体制を強化することで入試ミスを減らしたことは大きな成果だと思う。また、新型コロナウイルス感染症対策を講じ、原則すべての授業を面接授業として実施しているのはうらやましい限りである。加えて、コロナ禍においては休退学者が急増する傾向にあるにもかかわらず、増加していないことも凄いことである。これは面接授業をいち早く再開するとともに、新入生のケアにしっかり取り組んだ成果だと思う。

大学院定員充足率については、食産業学研究科において指標達成近くまで改善しているのは素晴らしい。この状況下で増やしていくことは難しいと思うが、大学院定員の充足100%の達成を期待したい。

看護学群で実施した「災害看護プログラム」と「国際看護プログラム」は、ネーミングも含めて魅力的なプログラムだと思うので、社会人のリカレント教育や大学院のプログラムに取り入れたり、各研究科に1つずつでも社会人向けのプログラムがあると大学院のPRにもなるので、是非取り組んでほしい。

計画No.40「学生による授業評価の実施と授業内容等の改善」の自己評価が「Ⅳ」なのは、授業評価のPDCAサイクルが確立されたことによるものと思うが、授業評価の結果が個々の教員の評価にも蓄積されているかが懸念される。授業は教員個人の資質によるところが大きいので、伸び悩む教員もいると思うが、教員の手抜きを防止するには学生による授業評価が有効なので、継続してもらいたい。

外部資金の獲得については、宮城大学の大和キャンパスが宮城県産業技術総合センターに近いという立地メリットを活かした方がよい。同センターの施設や機器の使用実績を増やし、連携していることをパンフレット等に掲載することで共同研究の申し入れなど外部資金の獲得につながっていくこともあると思う。

就職率が非常に高いのは宮城大学の強みだと思うが、令和2年度の価値創造デザイン学類の就職率が低かった要因があれば教えてほしい。

(井上副学長) 第2期中期計画の6年間に入試ミスはあったものの、それに対して組織的に対応・改善することができたところであり、人間がやることにミスが全く起きないということはありませんので、ミスが発生したときに適切なりきバリーができる体制になってきたと考えている。

現在の入試制度は、新たに導入された大学入学共通テストや国の高大接続改革を見据えたものとなっており、例えば、各科目において選択式を減らし、記述式を増やしたこともその一つである。こういったことが学力の高い学生の入学につながっていると思われる。また、令和3年度入学者選抜は、初めての大学入学共通テストの実施とコロナ禍が重なり、その対応に迫られたところであるが、そのような中でもミスなく実施できたことは6年間の積み重ねによる成果だと考えている。

(川上議長) 各学群で考えていたことを全学的な取組にしたことによってノウハウの蓄積が図られたので、センター組織の中でもアドミッションセンターの設置が一番効果的だったと考えている。

本学の大学院の特徴として、学士課程からの進学者よりも社会人学生が多いことが挙げられる。本学においては、4年で卒業し就職する学生がほとんどであり、大学院に魅力を感じ進学する学生も少しずつ出てきているが、大学院の中心は資格取得などのキャリアアップを目的とした社会人学生である。社会人の入学促進には、社会にいかに発信していくかが重要なので、それに向けて取り組んでいるところである。

「災害看護プログラム」と「国際看護プログラム」については、大学院で災害看護や国際看護を専攻するというよりは、それらを切り口に分野横断的に学ぶものと考えているので、学士課程でのプログラムとしている。

(風見理事) 御提案のあった宮城県産業技術総合センターや東北大学との連携、地域プラットフォームの構築が大変重要だと考えている。外部資金の獲得においても地域プラットフォームの強みを打ち出しながら様々な取組を行っているところである。公立大学として地域における産学連携も含めて地域プラットフォームにどのような強みがあり、その中で本学がどのようなネットワークの拠点になれるのかを意識して進めていきたい。

研究推進・地域未来共創センターでは、社会人向けの公開講座を多く実施しており、その中で看護分野についても看護人材育成・支援事業として看護職を対象とした専門研修を実施し、多くの方が受講している。

価値創造デザイン学類、特にデザイン系の学生の就職先については、大企業から小さなアトリエまで様々であり、就職が決まるまでに時間がかかる傾向にある。コロナ禍の影響もあると思うが、決まらない場合は次を目指すというクリエイティブさや多様な進路の選択という指導もしているので、引き続き支援していきたい。

(堀切川委員) すべての学類で就職率が100%という方が極めてまれであって、デザイン系の学生のように就職を急がず自らの技能を活かせる場所を求め

る学生がいる方が健全だと考えている。

社会人へのリカレント教育については、学群でも取り組めるし、単位認定プログラムについては、文部科学省が他大学院等の単位互換と入学前既修得単位認定の柔軟化として認定単位上限の引上げを行ったことにより、より社会人が学びやすくなっているのです、そういった制度も活用してみるとよい。

(大山委員) 宮城大学の学生と在仙の某私立大学の学生の出身エリアはほぼ同じだと思うが、双方の卒業生である当社社員を比較すると宮城大学の卒業生は大人しい。特に入社してからのチャレンジ力が弱い。サークル活動をしていた社員は今でも元気があるし、先輩後輩のつながりも持っている。アルバイトをしていた社員はそこで人間力が磨かれている。宮城大学については、サークル活動が盛んだとは聞いたことがないし、アルバイトについても市中心部と比べると立地的に不利だということがあるのかもしれない。コロナ禍で対面での活動ができなかったのだから、サークル活動に支援したらよいのではないかと。学業が基本ではあるが、サークル活動を支援することによって社会力や人間力が磨かれ、社会で活躍する人材の育成につながるはずである。

(阿部委員) 卒業生による評価は非常に有効である。私が東北大学の工学部長・研究科長をしていたときに外部評価を実施した。その際に、各学科・専攻から評価委員の推薦をしてもらったが、半数程度は各界で活躍している工学部卒業生であった。卒業生以外の評価委員からは非常に高い評価を得られた一方、卒業生である評価委員からは、愛校心があるため、現状に満足するなという厳しい評価であり、その差は歴然であった。しかもその指摘は的を射たものであった。大変ではあるが、卒業生の母校をもっとよくしたいという愛校心からくる意見には大切なものがあると思うので、10年か20年に1回くらいは卒業生による外部評価を実施してみるのもよい。

(川上議長) 大学として卒業生の所在を把握していないため、同窓会との関係を見直したいと考えている。また、東北大学大学院工学研究科には、毎年1回運営協議会委員長と呼ばれ、卒業生の委員とともに意見を述べさせてもらっているのです、工学研究科長とも話をしてみたい。

○ 議案1から3について異議なく承認された。

(4) 議案4 学長選考会議委員の選出について

- ・ 資料7に基づき、正木委員から説明があった。
- ・ 説明後、議長が立候補を募ったが、立候補する者がいなかったため、選出方法について意見を求めたところ、田中委員から事務局案の提示について提案があったことから、事務局から案を提示し説明を行った。

○ 議案4について事務局案が承認され、阿部委員、大山委員及び小野委員の3名が選出された。

	6 その他 (1) 宮城大学研究ジャーナルの創刊について - 資料8に基づき、風見委員から説明があった。 (2) 次回開催予定 - 次回の令和3年度第2回経営審議会は、令和4年3月に開催することを確認した。 7 閉会
--	--

この議事録は、令和3年度第1回公立大学法人宮城大学経営審議会の議事録である。

公立大学法人宮城大学

経営審議会議長

川上伸昭



議事録署名委員

西川正敏



議事録署名委員

石井幹子

